顕彰会便り

NO.7
平成元年（1989）10月1日
編集・発行
津田左右吉博士顕彰会
（美濃加茂市太田町3425-1
TEL0574－25－4141）

ご挨拶

会長　間宮瑞夫

この度、はからずも会長をお受けすることになりました。とても私ごとき者が責を果たせるものではありませんので、堅くお断りしたのでしたが、諸般の事情からお受けすることになりました。

会員の皆様をはじめ関係機関各位の暖かいご理解ご支援なしには何事をもなしえません。どうかよろしくお願い申し上げます。

本来ならば、ここで方針とか抱負を述べるべきでしょうが、あまりにも突然で、勉強もしておりませんので、私が津田先生とかかわった最初の頃のことを少し述べさせていただき、ご挨拶に替えさせていただきたいと思います。

昭和二八年四月、下米田中学校に在任中のことでした。新米の私が職員図書の中から生徒に向きそうなものを選んでいる時でした。明治維新に関する本と各時代の文学に関するものが多いことに気づきました。不思議に思いながら、二、三冊を開いて見ているうちに奥付けに「つださうきち」と署名がしてありました。驚きました。近代歴史学を確立した大権威者の本がこんなところにあるなんて。戸棚の本を全部開けて見ました。数冊出てきました。発刊されて間もない『文学にあらわれた国民思想の研究』などはとびらに「贈つださうきち」と記されていました。

その後も津田先生から学校へ本が送り続けられました。その中に「まだまだ図書が不足していると思います。今度も古本ですが送ります……」といった意味の手紙が添えられていたこともありました。この本の貴重さ、先生の業績等について若僧の私が職場の先生方に説いてもなかなか理解していただけませんでした。学校長にお礼の手紙を出してもらうのに一年かかりました。

現在、本会の活動が今一歩と言われる面もありますが、当時を思えば隔世の感がします。

再度、皆様方のご理解ご支援をお願いして御挨拶といたします。

真実は一つだ
津田左右吉

この文章は昭和63年11月発刊された愛知県小中学校長会編『愛知に輝く人々9』から許可を得て関係部分を転載したものです。

本のすきな少年

左右吉の父の藤馬は元尾張藩士で漢学（中学の学問）にくわしかった。そのため、四才のときから父について漢学を学んだ。ふつうなら遊びたいさかりの年ごろなのに、漢学の勉強を少しもいやがらなかった。

左右吉が生まれた前の年の明治五年（一八七二）、全国に小学校を置くことが決められた。左右吉も六才で小学校に入学した。

母のせいは、左右吉が、ちょっと血が出たくらいのすりきずでも、いつまでも気にする子であることが少し心配だった。「今、帰ってくるとき、左右吉がお宮の森で遊んでいたよ。」

「そうですか。何をして…。」

「それがね、ほかの子はみんな木登りをして遊んでいるのに、左右吉は一人だけでささ舟を作って川に流しておったよ。」

「やっぱり。あんなふうでだいじょうぶでしょうか。男の子なんですもの心配ですわ。」

「うん、男の子としては、ちょっと弱虫のようだな。でも、いいじゃないか。左右吉には左右吉のよいところがあるんだから。」

「だって、あれでは……。」

「だいじょうぶだよ、あれは、本がすきなようだ。それがよいところだよ。人間一つでも見どころがあれば、それでけっこうじゃないかね。」

「でも、もっと元気よくお友だちと遊んでくれたらと思いますわ。」

「それは親のよくだよ。今は本が友だち、それでじゅうぶんだよ。」

左右吉は、こうして本のすきな少年として育っていった。

原書にあたる

明治二十三年（一八九〇）、左右吉は上京して東京専門学校（今の早稲田大学）政治学科に入学した。そこを卒業したころ、世話になっていた教育学者沢柳政太郎の家で白鳥庫吉を知った。

庫吉は、大学を出てまもない学習院の教授であったが、すでに博士の学位を持っている若い歴史学者であった。

二人は、いつも学問の話をした。話が歴史のことになることもたびたびであった。

「津田くん、きみもなかなか歴史に興味を持っているようだね。」

「小学校のころの先生が歴史のすきな人でしてね。むかしの歴史書をわかりやすく話してくださったりしたので、そのせいかも知れません。」

「ぼくと同じ学問に興味があるというのはうれしいよ。何か、読みたい本があれば、学習院で借りてくるよ。遠りょなくそう言ってくれたまえ。」

庫吉とたびたび話をするうちに、さらに歴史にひかれるようになっていった。

明治二十八年（一八九五）の冬、庫吉をたずねると、

「津田くん、中学校（今の高等学校）の『西洋史』の教科書を書いてくれんかね。」

と言われた。

「わたしが教科書を……。だめです。とても引き受けられません。そんな大事な仕事ができる自信はありません。」

「いや、もう引き受けてきたんだ。きみならやれると思ってね。今ごろだめだと言っても、きみ、手おくれだよ、はっはっは……。」

これは、庫吉が、（なんとか歴史学者に育ってほしい。）という思いで、左右吉のために引き受けてきた仕事だった。

左右吉の図書館通いが始まった。左右吉はそのころ中学校の教師をしていたので、図書館へ行くのは、どうしても夜になった。

「もう、へい館します。明日にしてください。」

「すみません。もう一さつだけ原書（元の本）を調べさせてください。五分、五分だけ待ってください。」

「またですか。昨夜も無理を言ったではありませんか。」

左右吉は、日本の歴史についての知識はあったが、外国の知識はほとんどなかった。調べかけると、どうしても原書を読まねばわからぬことが多かった。そのため、図書館の係員に迷わくをかけることもたびたびであった。

そして、一年半がたった。

「津田くん、おつかれさん。短い期間によくこれだけまとめてくれたね。政治史だけでなく、それとつながる経さい、文化までがよく説明されている今までにないりっぱな教科書だよ。いやありがとう。」

「いいえ、わたしこそお礼を言わねばなりません。この仕事で、すべての原書にあたらねばならないことがわかりました。」左右吉が二十五才のときであった。

25歳頃の津田左右吉博士

歴史と神話

明治四十年（一九〇七）、左右吉は庫吉が主任をしている歴史研究所の調査員になった。歴史学者としての出発であった。まず、日本国民の思想（考え方）を明らかにすることを研究の目あてにした。

「明治の新しい時代を生み出したのは何か。」から研究を始めた。しかし、それを知るためには江戸時代、江戸時代がかわるためにはさらに前の時代をと、結局、神話や歴史・伝説が書かれている「古事記」や「日本書紀」までたどるこ

とになった。

「津田くん。どうかね、研究は進んでいるかね。」

「先生、学問はおくが深いですね。日本民族の思想を知るためには、中国・朝鮮半島など、アジアの人々の考え方、くらし方まで考えねばならぬと思いますが……。」

「そうだよ、そのとおりだよ。日本民族は、アジアの他の民族と無関係であったのではないのだからね。ゆっくりやりたまえ。」

庫吉にはげまされ、大正二年（一九一三）、「神代史の新しい研究」を出版した。そのころ、日本の国の成立を物語る神話がどの本にも歴史として書かれていた。これをうたがい、学問的に説き明かそうとしたのがこの本であった。その後、「文学に現は（わ）れたる国民思想の研究」「古事記及び日本書紀の研究」などを出版した。どれも、今までどの学者も手をつけていなかった研究であった。

昭和十四年、左右吉の書いた本は、日本の建国の歴史にうたがいを持つけしからぬ本であるということで、発売禁止になってしまった。日本が、戦争の深みにはまりこんでいく時期であった。

（わたしは、日本民族がすばらしい神話を持っていることをほこりに思っている。しかし、神話は歴史ではないのだ。この考えはまちがっていない。真実は一つだ。今にわたしの考え方が正しいことがわかってもらえる日がくる。それまでは、じっとこらえねばならぬのだ。）

左右吉は、大正七年（一九一八）以来つとめていた早稲田大学の教授もやめてしまった。しかし、「神話は歴史ではない。」という信念はだれが何と言おうと変えなかった。

富士山のような

太平洋戦争が終わった。今では、「神話は歴史ではない。」という左右吉の考え方を、どの学者も説くようになった。

「真実は、いつかはその正しさがわかってもらえる日がくると信じていたよ。」と、左右吉は弟子たちにはればれとした顔で語った。また、戦後になってから、左右吉と同じように説く学者を悪く言う弟子たちには、

「いいじゃないか、みなさんが、わたしの考えの正しさをみとめてくれたんだから…。」と、その弟子たちをたしなめるのだった。

「わかったことが多くなるにつれ、わからないことも多くなる。学問とはそういうものだよ。それだけぎ問が深く、細かくなる。あるいは大きくなる。それを一つ一つ調べて、やがてそれがまとまった知識になるものだよ。」

「学問とは」という質問にこう答えたように、一つ一つを原書によって確かめ、関係のあることがらを時代をさかのぼって調べて明らかにすると いう研究方法をとった。これが、近代歴史学の研究方法のもととなった。

日本の古代から近代にいたる歴史だけでなく、古い中国の思想の研究、古代朝鮮の歴史・地理の研究など、左右吉の研究はすそ野が広く、また高くそびえており、その研究は富士山にもたとえられた。

昭和二十四年に文化勲章を受け、その十二年後、八十八才でなくなった。告別式の式場には、左右吉の書いた本二百数十さつが山のように積み上げられ、その業績を物語っていた。

津田博士と象徴天皇

尾関　公見

終戦後いち速く制定された平和憲法の第一条に、

「天皇は日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であってこの地位は主権の存する日本国民の総意に基く。」とあります。法律について全く無知であり、日本国の正しい歴史の歩みについても的確な判断を持たない私は一見妙な表現だなあーと独り想いをしたものでした。

時を経て津田博士について関心を持つようになった頃この用語は博士が嚆矢（こうし）であるという記事を読みびっくりしました。

偶々朝日新聞の記者が博士の取材の為来宅された時この事に話しが及び「どの著書に出ていますか」と質問されたが即答が出来ず、恥かしい思いをしました。以来気にかけつつ著述を読んでいましたが

見極めることなく時日を経過しました。

昭和二十五年中央公論七月号で元号問題が発表されました。（一部を原文のまま転記）

「要するに昔も今も天皇は権力を以て国民に臨まれず、政治上に主動的なはたらきをせられないので、そこに日本の天皇の特質があります。しかしそれでありながら天皇の地位が少しも動かなかったのはそれは天皇が国家の象徴であられ、国民統合の象徴であられたからであります。

……一部省略……

憲法で象徴ということばを使ったのはだれの考から出たことか知りませんが、私はよいことばを使ったものだと思います。

私自身のことを申すのはいいにくい気がしますが、私は皇室は国民的精神の象徴、または国民的結合の象徴であることを三十何年も前に公にした著書の中で明白に書いております。」

昭和二十七年中央公論で発表された日本の皇室という論文でもこの事にふれ

「表現の発案者が何人であったかは知らぬが、これはいみじくも規定され、またいみじくも表現せられたと考えられる。」と

両文の中でこの表現を大変に喜ばれ、感歎の言葉を記していなさるが自分の事については、世によく見かけるような自慢、自惚れ、誇張めいた節は少しもなく極めて謙虚な奥ゆかしい博士の御人柄が偲ばれて益々尊崇する念が湧いて来ます。

さて昭和二十五年に三十何年前とすると大正五年八月絡陽堂から出版された『文学に現れた我が国民思想の研究―貴族文学の時代』で自序の中に

「国民的活動の中心として又国民的精神の生ける象徴として、限りなき敬愛の情を皇室に捧げてゐる、という現代の我々の尊王思想は……」と明記してあります。

一九一六年博士四十三才の時であり、今から七十数年前に既にこの語句と、その内容をはっきりと述べられていますが、かくの如き博士の識見は時の移り変りにかかわらず今も尚生々とし、将来永久に光り輝く事を信じ筆をおきます。

お知らせ

○市外研修 来る十一月十四日（火）愛知県半田市の新美南吉顕彰会を訪問し活動内容を研修します。対象は会員全員、定員30名申込は十月末日までに地域の理事へ

○津田左右吉伝記資料展

『津田左右吉全集』（岩波書店）の二回目発刊の完結にちなみ、特に博士の人柄を親しみやすいかたち、たとえば日記、稿本、書簡、遺品等で紹介する予定です。

また、早稲田大学から津田博士の研究者に来てもらい、講演会も予定しているのでご期待ください。

○津田左右吉紹介番組

去る八月十二日、名古屋テレビの「歴史ウォッチング」という番組で『～古代史研究の先駆者～津田左右吉』が放映されました。津田博士の生家、下米田小学校・津田文庫、小山観音、津田博士の記念碑など、美しい下米田の風景のなかでロケーションが行われました。テレビ会社から録画テープの寄贈がありました。貸出しますので希望者は事務局まで。

新会員募集中

現在、津田博士顕彰会の会員数は、下米田町を中心に約650名。博士の業績をたたえ、後世へ伝えようと各種記念事業をはじめいろいろな活動をしています。私たちはひとりでも多くのみなさんに理解をいただいて、現在の輪をもっと大きくしたいと考えています。詳細及び申し込みは、美濃加茂市社会教育課内・津田左右吉博士顕彰会電話二五―四一四一まで。またご意見・ご感想もお寄せください。